

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 29, No. 4 神奈川県立生命の星・地球博物館 Dec. 2023



シジュウカラガンのいる風景

A: 一斉に飛び立った群れ

2023年10月31日

B: 水浴び

2023年10月31日

C: マガン(右)との混群

2023年10月30日

宮城県大崎市／重永明生 撮影

かとう
加藤 ゆき(学芸員)

秋になると、日本には様々な^{ふゆどり}冬鳥が渡来します。その代表ともいえるのがガン類で、主な越冬地は宮城県の伊豆沼や^{かぶくり}蕪栗沼周辺です。ここでは日本に渡来するガン類の9割が冬を越すとされており、マガンをはじめ、ヒシクイやシジュウカラガンなど約十萬羽が見られます。

彼らは湖沼をねぐらとして利用し、夜が明けるころ一斉にねぐらを飛び出します。そして周辺の農耕地へと舞い降り、採食をしたり休息を取ったりした後、夕方になると再びねぐらへと戻ります。

ごく普通の冬の風景だと思うかもしれませんが、かつてガン類は^{しゆりょう}狩猟や開発による環境消失の影響により激減しました。その後、マガン等は羽数が回復しましたが、シジュウカラガンは1シーズンに多くても数羽しか渡来しないという状態が続きました。しかし、30年以上にわたって行った繁殖地での保護対策が功を奏し、今では数百羽単位の群れがいくつも見られるまでに回復しました。長年の努力の成果である『シジュウカラガンのいる風景』を大切にしていきたいですね。